

## ご挨拶

### 会長顔写真

山口県スキー連盟会長 中村克巳

このたび、山口県スキー連盟創立 70 周年を迎えます。連盟創立は昭和 22 年 10 月 28 日ですが、これ以前の山口県でのスキーの発端と発展についても知り、その情熱を感じて頂きたいと思い、ここに簡単に記載いたします。

まず、日本での発祥の歴史です。オーストリアの軍人テオドール・フォン・レルヒ少佐が、新潟の地で日本初のスキーを教えた明治 44 年 1911 年 1 月 12 日が日本のスキー発祥の日とされています。このレルヒ少佐が配属されたのが新潟県の陸軍高田師団で、師団長が長岡外史。彼が良かろうと任せることを決めたのが陸軍大臣の寺内正毅。ともに山口県出身者です。また、長岡外史の元で直接スキーの指導に当たったのが山口十八。山口県萩の出身です。スキーを陸軍のみでなく、民間人にも指導する予算として、現在の金額にして 1 億円を使ったようです。日本にスキーが入って発展する段階で、山口県人が重要な働きをしていました。誇りにしたいと思います。

次に、山口県で最初のシュプールを描いたのは、大正 14 年、1925 年 12 月、山口高校講師の嶺亮介と、後に嘉年村の村長になる山根一郎です。レルヒ少佐のスキー教示の 15 年後で、全日本スキー連盟の創立もこの年です。年が明けた大正 15 年の 1 月には、嶺は山口高校陸上部内にスキー部を編成し、十種ヶ峰で滑走を行ったようです。これを防長新聞が大きく報道しました。マスコミへの対応もうまくやっていたようです。

昭和 3 年には徳佐で体育会が作られ、ゲレンデを整備し、休憩小屋を作り、うどんやぜんざいの販売をしたとのこと。また、この年にむつみ村の伏馬山にスキー場ができました。

昭和 5 年には、嘉年の台山のスキー場もでき、スキー人口の裾野が広がっていったのでしょう。昭和 5 年 1 月 12 日に、山口県山岳スキー協会が設立されました。これが戦前の山口県スキー連盟の起源になります。

この昭和 5 年に、国は金本位制を復活させ、一気に景気が悪くなり、歴史上最悪の昭和恐慌に入っていきます。この恐慌は昭和 6 年 12 月に、高橋是清の経済政策で回復しはじめます。山口県のスキーの普及にはあまり影響がなかったような感じです。

昭和 7 年に第 1 回、昭和 8 年に第 2 回近県スキー大会を開催。選手・観客あわせて 200 名が参加とあり、現在のスキー大会と遜色ない状況だったようです。

昭和 10 年 12 月 9 日、山口県スキー連盟と名称変更。県連盟といいながら、個人加盟の小規模な連盟組織であったようです。県連主催の「競技会の開催、講習会の開催、講師の派遣、学校主催の講習会の後援などを行う。」ということ活動を活動方針としていて、現在のスキー連盟の活動とほぼ同じで、スキーの普及発展のためには基本的事項と思います。

昭和 12 年、日中戦争が勃発。山口県では、スキー場開発ラッシュで 4 つのスキー場が開

設されました。

昭和 13 年には、八木千太郎の発起により、山口市とその近郊のスキー愛好家を集めて、山口銀嶺会が発足。この会のメンバーが、戦後のスキー連盟の設立に活躍します。

昭和 16 年 12 月 8 日、太平洋戦争が始まり、昭和 17 年、日本スキー連盟は解散し、大日本体育会スキー部会として加盟。山口県スキー連盟も解散。

昭和 18 年、県体スキー大会開催。戦中最後の大会になります。

戦後は、昭和 20 年 12 月 1 日に日本スキー連盟が戦後再発足し、山口県では、昭和 22 年 1 月に毎日新聞社、山口県体協、山口県スキー連盟（戦前の連盟組織体制と推測）の主催で、船平山で講習会兼スキー大会が開催されました。戦後の食糧難の時期に、スキー大会が開催されたのには、「敗戦による虚脱状態からの脱却」の意味もあったようです。

以上が、現在の山口県スキー連盟が発足する昭和 22 年以前の山口県のスキーの歴史の概略です。先人達が戦前・戦中・戦後と困難にも負けず、一貫したスキーに対する情熱や普及への強いエネルギーを感じられると思います。

最近では、暖冬による雪不足、レジャーの多様化もあり、スキー人口の減少や、スキーヤーの高齢化が重なり、スキーに対する情熱は少し減退してきているのではないかと思います。

この連盟創立 70 周年を機に、山口県のスキーの発祥時の歴史に鑑み、もう一度スキーへの熱い情熱を呼び戻し、スキーをもっと楽しみ、スキー・スノースポーツの普及にもう一度がんばろうではありませんか。このまま、山口県のスキー・スノースポーツをフェードアウトさせることがあってはならないと思います。皆様の努力、協力をよろしくお願い致します。